

上ったり下ったり、木の根につまづいて何度も転倒し、夕方になると馬に追いつけぬほどに疲れた。

ある晩、哨舎の自動小銃がけたたましく鳴った、さてはだれか脱走をはかったのか。全員人員点呼の結果一人不足、翌朝その若い少年兵だった彼は生きる希望も何も捨て、地獄の苦しみから逃れるため、廃屋の馬小屋に首をくくって帰らぬ人となっていた。

次には春になってからのこと。空腹のあまり湿原に茂っていた野草を二人で食べて物凄い苦しみで毒死したり、馬鈴薯を生かじりして中毒死した人もあった。我が方の軍医殿も数人いたが、何の薬もないことには、見えて息を引きとる立ち合いしかなかった。最後に小さな声で『おかあさん』とかすかに言って死んでいった東京生まれのその人を忘れることはできない。

書いた例は私のラーゲル五百人程度の中での出来事であり、それすら全部ではない。望郷に食いがれ無念の死を遂げたこれらの人たちはどこへ埋葬されたか知らない。多分トモニ河畔の白樺の林の中に眠っていると思う。

茫々四十年の歳月は過ぎたが、私は生きてる限りこの悲惨さを忘れないであろう。

シベリアに抑留されて

新潟県 矢部 松二郎

第一部

戦争あれから四十三年、今でも思い出すと胸がつかまる。「あれが夢であればいいが」そんな生やさしいものではない。戦争は悲惨で恐ろしいの一語に尽きる。

昭和十九年三月応召、九州は下関から船に乗り、釜山經由で旧満州のハルビン阿城第一〇二二部隊に配属され、昭和二十年八月十九日引揚げ途中の開拓団から、無条件降伏を知らされた。その後、何者か、恐らく旧満州人の襲撃に遭う。山中をさまよい歩き、ようやくハルビンにたどりつき、武装解除を受ける。このときからソ連軍給食となる。

ある日突然、「全員集合」の号令が鳴り響く。各中隊ご

とに全員集合整理した。そのときソ連軍将校が通訳を連れて、定位置につき声高く、「お前たちは、もう戦争が終了したのであるから、近日中に東京に帰ることになるので、各自健康には十分注意して、東京に帰ったなら、民主日本再建のために努力しよう望む。なお近日中に出発するが、途中日本軍が破壊した道路や鉄道を修理しながら行軍することになる。以上。」

折りから寒さに向かう季節だが、日本に帰れるその言葉だけを信じて、昼となく夜となく、休みなしの死の行軍の隊列が続く。ときには眠りながら歩く。途中持っている荷物を捨てながら歩く。バタバタと倒れる者も出てくるが、そのまま置き去りにして、死の行軍は黙々と続く。やっと最後の集結地に到着した。私たち中隊は二十数人が死亡したと聞かされた。今でも語り続くシベリアへの死の行軍であった。

いよいよ最後の集結地より屋根つきの貨車に乗せられ、前の貨車には、食糧や炊事用の釜も積み込まれ、各貨車ごとの食事当番も決められて、もう貨車の出発を待つばかり。死の行軍で生き残ったどの顔を見ても、かす

かに笑顔が戻ったようだ。あと幾日で船に乗り日本へ上陸して、故郷へと……。ただただそれだけの思いを乗せた列車は夜中に急にガタツ、ゴトツ、ガタツ、ゴトツと最後の汽笛を寂しげに残しながら、日本軍人の運命を乗せながら、二本のレールの上を走る、ただひたすら走る、旧満州をあとに……。鉄橋を渡る轟音に、夢を破られ、目が覚めた。ものすごいスピードで走っている貨車の中は暗く、釘で打ちつけられている窓の板のすきまからようやくのぞくと、月明かりである空を見上げると、北斗七星が手に取れるように近く美しく光をはなっている。そのうちに戦友たちも起き出して、窓板を破り付近を見ると、粉雪が降り、ソ連特有の丸太を組み合わせた家々の赤い屋根が転々と目に珍しく通り過ぎていく。とうとうだまし連れられてきたシベリアへ。すっかり明るくなった視界には、ソ連の小供たちが手を振って叫んでいる。「ヤアーイ、日本の捕虜だぞうー。」と言っているのであろう。

貨車からシベリアの地へ第一歩をおりたときは、小雪がチラ、チラ降っていた。そこからまた行軍して、到着

したところがタランジャンという地名だそうだ。人間の住む家屋もない、また目ぼしいものは何もない。ただ、冷え冷えとして屋根のないコンクリートの建物だけで、牛や馬を入れてあった建物だそうだ。ここが仮のシベリア抑留地の宿であった。

ソ連兵の指示で、分かれ分かれに分散して、牛馬小屋へ収容された。貴重品であるたった一枚の毛布を掛け合って、重なり合うようにして横になり休む。コンクリートの床が冷たく、肌に突き刺さる。あまりの変化と、日夜の強行軍でいつしか眠る。寒さに目を覚ます。早い夜明けだ。掛け合った毛布の上が粉雪で真っ白い。

この収容所に三日間抑留されて、全員別々にトラックに乗せられて、山また山の間道を寒さに震えながら次の収容所へと突っ走る。やっと到着したところが立派な収容所である。丸太を積み重ねた家屋の建物の間からは、暖かそうな湯気のようなものが立ち昇って見える。ソ連兵に「ブイストレ、ダバイ、ダバイ。」急いで、早く早くとせき立てられ、トラックからおろされて、収容所の前に整列させられた。人数を確認しなければ、所内にはは

いけない。

この収容所は千人収容できるとのことである。収容所の周りには、三重の柵が張りめぐらされて、有刺鉄線が取りつけられ、四隅には高さ二十メートルくらいの望楼が建てられて、交代でソ連兵が自動小銃を肩に監視している。収容所の出入り口には、監視のため衛兵所があり、その前に二メートルくらいのレールが二本合わせて、太い針金で結んであり下げている。起床と作業出発の合図の鐘である。この鐘を「地獄の鐘」と呼び、恐れられている。

ようやく人数が確認されて、トラック輸送の責任者から、この収容所「ハバロフスク地方イズベスト地区第一一収容所」の所長に引き渡され、強制収容された。短期間であったが、せっかく知り合った戦友とも、またまた別れ別れにさせられた。後日聞いた話であるが、日本人はすぐ仲よしになるので、団結をこわがって、一定の強制労働が終業すると、次の収容所へ異動させるのだと、先任兵が語ってくれた。「東京ダモイ」帰国のその一言で、多くの兵隊がだまされ続けられてきた。

さて収容所内の宿舎に分散される。安住の場所は、ちょうど十字架を二本並べて、その間に板を渡してあるだけ。下段に二人、上段二人、計四人で休むもの、あとは何もなく、私たちは「とまり木」といって、これが強制留置者に課せられた「安息の場所」であった。

伐採作業の強制労働収容所である。あまりの環境の移り変わりに、魂の抜け殻のように身体を横たえ、まどろみながらいつのまにか眠ってしまった。グワラリン、ゴーン、グワラリン、ゴーンと起床の「地獄の鐘」に起こされた。午前六時ごろであろう、朝食だ。各班ごとに個々にパインの缶詰の空き缶と各自手製のスプーンを持って、我れ先にと食堂へ駆け込む。炊事班の兵隊から、スプーンを空き缶に八分目くらい配給された。大豆汁あり、あわ汁あり、梅干汁あり、今朝の配給は大豆汁で、空き缶の底にスプーン一杯の大豆があった。残りのスプーンを缶に口をつけながらゴクン、ゴクンと飲み終わり、別の缶と一緒にスプーンともども大切に腰にぶら下げると、同時に作業出発の「地獄の鐘」が響き渡る。

作業出発点呼のため、衛兵所前に各班ごとに五列縦隊

に集合整列する。間もなく収容所所長がソ連兵を従えて定位置につく。「収容所長に、敬礼っ、かしらあー、なかあー」日本将校の張りのある声が汁腹に、シベリアの寒風とともにビリビリ響く。

このときから、シベリアでの重労働が強制されたのである。五列縦隊に整列させて、人数点検する。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十まで数え、五十人と記入しまた同じことを繰り返して五十人と記入。これを全部合計する計算で一時間以上も寒風にさらされて、齒の根も合わずガタガタ震えがくるので、足踏みをしながら人数点検が終わるのを待つ。

やっと人数点検が終わり、衛兵所前の門より柵外へ出る。材料倉庫で、三人一組になり、伐採に使用する道具、鋸、斧をソ連兵より受領して、また五列に並び。先頭と最後尾、それに中間のところどころに自動小銃を持ったソ連兵が、監視のため終業まで同行する。作業の目的の地まで「五列、五列、急げ、急げ」片言の日本語でせまたてる。伐採作業現場までの山道は、細くでこぼこあり、両端を歩く戦友は、斜めに走るようにして歩く。途中ソ

連兵の気持ちにさわるようなことがあれば、自動小銃を空に向けてババーンと発砲して威嚇する。

収容所より約三キロくらい行軍、目的の伐採現場に着いた。平場と違って雪が多い。また木が密集して、なかなかの森林である。鉄道の枕木にするとのことで、早速三人一組で作業に取りかかる。ソ連兵に指示された、切り倒す大木の根本の雪を踏みつけて、二人でできるだけ根本のほうから、鋸で前と後ろに引き押しする。三分の二くらいに切り入れると、反対側から、少し上の方を同じ容量で引き押しする。最後に斧で斜めに少しずつ切り込みを入れる。「おーい、倒れるぞうー」事故防止のため、必ず合図をし合う。ドドドドーン、バリバリ、ドサッーンと山の斜面を半回転しながら倒れる。倒れた木の小枝を斧で切り落とし、燃やして暖をとる。白樺の木が意外と多い。白カバの皮をはぎとる。面白いほどにはがれる。これが火種になるが、煙がたくさん出て顔がすすける。私たちの作業服装は、夏物の軍服で、軍手使用で、鋸や斧を使って三十分もすれば、手や足の感覚がなくなってくる。また小枝を斧で割ると、ときどき小枝の

割った中に、真っ白い凍りついたサナギのような虫が入っている。二人で火に熱すると、プチッとほじける。それを三人で手に取り、むさぼり食う。「あまい」口の中で溶けて「うまい」、三人とも汁腹を少しでも満たしたいので、斧で小枝を切り割っては、サナギのようなものを取り出す。作業がおくれる。「日本の兵隊作業しない。食事だけ多い」監視のソ連兵が大声でどなり散らす。抑留者だったのだと現実に戻り、伐採作業に取り組む。

いつのまにか昼食時になる。作業のできない仲間が、二十人くらいで山道を天秤棒の真ん中にスープのおけをつり下げてヨロヨロ、ヨロヨロと担ぎ登ってくる。ソ連兵が配給係で、朝食と同じようにスープを空き缶に八分目受け取る。やけに空き缶が重い。スプーンで掻き上げて見ると、梅干しの種が五、六個あった。スープをすするとすっぱい。梅干汁だった。昼食だけは、昔の桃マツチの小箱二個合わせたくらいの黒パンが一個同時に支給された。黒パンをスープの中に入れる。ふやけて倍以上になった。残った梅干の種は、火に熱して斧で割る。真ん中に実がある。なかなかおいしい。遠くからスープを

運搬して来るので、冷たくなっている、火に熱して、鼻水と一緒にすする。

またソ連兵にせきたてられながら伐採作業が続く。倒して小枝を切り落とした木は、枕木の長さに切り、三人共同で下の平地まで搬出する。そのあとは運搬作業班が目的地まで運ぶことになっている。「ノルマ」作業量は、長さ六尺、幅六尺、高さ六尺として積み重ねて、作業ノルマは完了するのである。寒さは寒し、腹はすく、小便をするたびごとに空腹を訴える。作業ノルマを完了しなければ、収容所へは戻れない。異国の地に眺める落日のころ、やっと収容所へたどりつき、鋸と斧を作業倉庫へ返納、人数点検を受け所内に入る。

夕食のスープ汁を食堂で受け取り、すきっ腹に流し込み、終わる間もなく民主々義の講和を聞くため、所内の講堂へ集合、それが終わってやっと宿舎に帰る。暗い宿舎に伐採作業中に取った白樺の皮を燃やして、明かりの代用にして、「とまり木」にゴロリと着の身着のまま横になる。

夜明け前には必ず空腹のために目が覚める。便所へ行

くため宿舎を出る。便所は少し離れた宿舎裏の空地に、幅二間、長さ四間くらいの細長い大きな手ごころの木が二本組み合わせて荒縄で回しじめにして、大きな穴の上に縦に渡してある。荒縄は滑りどめで、大小便とも共用である。白樺の木をまたいで大小便するが、紙など全く使う必要がない。来る日も来る日も、引揚船に乗船するまで、毎日毎日、汁と、小さい黒パン一切れの常食で、排便も山羊のようにポロ、ポロと雷おこしのごとく排便されるので、紙を使用したこともなかった。間違って穴に落ち込んだら、這いあかることは不可能である。用便をすまして宿舎へ戻ると、もう空腹で眠ることができない。戦友たちが三々五々起き出して遠い日本の故郷や、真っ白いご飯、だんごやおはぎの食べる話だけである。その話も尽きると、日本へはいつ帰れるのか、終戦後の日本は、故郷は、いつ家族や友人は、また日本の自然で美しい青々とした野や山川等々話はずむ。

ジャラーンゴーン、ジャラーン、ゴーン、突然「地獄の鐘」が鳴り響く。作業出発時間にしては早すぎる。食事が早いことは、ありがたい。「伐採作業班、全員集合」

伝達係が各伐採作業班の宿舎を回る。収容所長から話があるとのこと、気の早い物は、東京へ帰る話ではないかと、勝手に想像する。「伐採作業班は、本日は作業は休む。朝食後、入浴を実施す」収容所長の話は東京「ダメイ」帰国の話はなかった。すっかり忘れていた入浴、何か月ぶりだろう。入浴場前に整列、二十人ずつ中へ入れられる。中はムツとする熱さである。中は広く、真ん中に十人くらい入れるような四角の湯船らしきものに、もうもうと湯気が立ち上り、視界もあまり定かでない。入浴者全員素っ裸になると、入浴係のソ連兵が来て、夏の軍服、下着類等衣紋かけにつるして、全部持ち去っていく。不衛生のため、熱気消毒をするのだということだそう。ソ連兵から借用した小ばさみと安全カミソリで、髪の毛は戦友同士短く刈り合う。顔の髭と脇の下などの毛は自分で全部剃り落とす。二人一組で、日本の風呂おけの三倍の大きさの木おけで、係からお湯をもらい、二人で適当にお湯を分け合って、素手で、顔、頭、身体を洗う。石けんなんて抑留者には支給しないのだろう。手の平でこすると、何か月分のあかがポロ、ポロ落ちる。

もう一回最後のお湯をもらう。三人で順々に頭から最後のお湯をかけ流して、入浴を終わる。

出口にソ連軍の女医が机を前にして、腰掛けて待っている。入浴を終った者から順々に素っ裸のまま、両手を頭のうしろに組み合わせられて、毛を剃り落とした脇の下ほかを丸出しにして、女医の前に一人々々立たされる。何をされるのかわからないまま、ドキッ、ドキッと胸がしめつけられるようだ。「大変よろしい」「オーチン、ハラシヨ」女医が一言、今度はそのまま後ろ向きにさせられて、尻の肉を女医が親指と人差指で引っ張る。全身ヒヤッとする。「大変よろしい」「オーチン、ハラシヨ」また一言女医が言う。これで入浴は終わりだったが、胸がまだドキドキする。お尻の肉が簡単につまめる者は、

「駄目」「ニハラシヨ」

シベリアでは、水が貴重品だった。熱気消毒室の係り被服を受領したが、綿入れの旧満州服である。軍服も下着類もまたポケットに入れてある貴重品も全部没収されたのである。強制支給された満服を来て、入浴場を後にした。こんなことが許されていいものか。戦争、いや

敗戦、これが勝者と敗者の現実で、異国の地シベリアで
実際行なわれている。

夕食も終わり、そろそろ民主々義の講和の時間ころかな。「伐採作業班は大至急集合」こんな夜に集合させるとは何だろう。作業支度をし、空き缶とスプーンを持って、急いで集合場所に整列して待つ。「お前たちは、作業ノルマを達成し成績優秀であった。よって、東京帰国のため、異動することになったので、直ちに出発せよ」通訳を介しての収容所長の一声であった。東京ダモイと、幾度となく聞かされたことか、今度こそ本当だろうと、二年有余もだまされ続けられ、軋々と過酷な重労働強制収容所を回らせられたのだ。本当に喜んでいいのか、まだ信じることができない。ナホトカ港で引揚船に乗るまでは……。

一人思い出しているとき、衛兵所の門の外に輸送トラックが数台とまる。一人々々確認のためか、名前を読み上げられ、腰につけた空き缶をガラガラ音を響かせながらトラックに飛び乗る。トラックのエンジンがかかると星の輝く夜空の山道を突っ走る。振り落とされては

この世の終わりかと、手にさわるものにしがみつく。何も知らぬげに、星は下界を照らしている。「おやつ、なんだった」トラックが二台別の方向の山道へ走り去っていく。雪煙を残しながら。また別れ別れにさせたのだ……。やはり東京帰国はうそだった。次はどんな収容所の強制労働が待っているのか。ただただ運命を天に任せるのみ。どうしても生きて日本の土を踏むまでは。踏むまでは……。

第二部

点々と収容所を強制移動をさせられているうちに、寒いシベリアで二年目の夏を迎えた。やっと落ち着いた収容所は草刈り作業場であった。労働は軽作業であるが、定まった作業時間がなく、日の出から日の暮れるまで作業に追われる毎日である。

私の抑留されたこの収容所も三度の食事は実のないスープばかりだった。空腹をこらえて便所に行き用を足して帰る間もなく、地獄の鐘が、まだ明けきらぬ空にジャランゴーン、ジャランゴーンと気味悪く収容所のすみずみまで鳴り響く。「おーい起床だあー起床だ

あー」と叫ぶ声があっちこっちで聞こえる。「朝が早いので起きるのがいやだけど、スープが早く飲めるのでうれしいよ」意地を張ってつぶやく連中もいる。

時計を見ると午前四時、朝食のスープを胃袋に流しこみ表門の衛兵所の前に整理して、人数を点検確認して、ソ連兵の作業責任者より防虫面とロシア鎌を受け取り整理する。ロシア鎌とは、柄の長さが約六尺あり、中間のやや下のように取っ手がついている。刃の長さが約二尺五寸ぐらいあるだろう。三日月型になっており、その大鎌を肩に担ぎ収容所をあとにする。朝露を踏みしめながらヨロヨロ、ヨロヨロと歩く。時折肩の大鎌がキラリ、キラリと目にしみる。もうこのころは「シベリアぼけ」という言葉が流行していた。

草刈り作業場まで約二キロくらい行軍すると小高い丘に到着する。でこぼこであるが、見渡す限り私たちの首まである草原であった。だれが着たのかわからない色あせた夏の軍服も、肌まで通る朝露でビッシヨリ。

いよいよ作業開始だ。防虫面を頭からかぶる。紐を首で結ぶ。大鎌を肩からおろす。一列横隊に並ぶ。一番左

端から右へバサリー、ザアーとなぎ倒す。三メートルくらい進むと次は二番目、次は三番目と順々に進む。プウワーンと蚊やブヨの羽音が聞こえて無数に空に飛び立った。朝露のため、蚊やブヨは草の裏側にとまっている。バサリー、ザアー、草のなぎ倒される音が朝の空気を揺がす。栄養がないためか蚊やブヨに刺されると、体質の弱い戦友は発熱して入院することがある。あちこちで枯れ木を集めて燃やして、蚊やブヨを防ぐ煙が立ち昇る。

この地区の草刈り作業場は毎日午後から一時間くらい、物すごいスコールがやってくる。ゴロゴロゴロ雷が鳴る。ザッザー大粒の雨が鎌を握る素手にたたきつける。手の甲が痛い。ソ連兵は急いで雨具を身につける。私たちは牛や馬同様である。もちろんシベリア抑留者であることを忘れてはいけない。土砂降りの雨の中、昭和の月形半平太のごとくぬれていこう。下着はもちろん、ふんどしまでビッシヨリとしづくがしたり落ちる。こんな情景になると、なんとなく日本のふるさと思いが出す。雨の音をリズムにして歌声が聞こえる。「泣くな妹よ、妹よ泣くな、泣いて叱った兄さんの、涙の声を

「忘れたか」歌は人生の並木道だった。やがてみんなが一緒に歌う。望郷の涙と雨のしづくが顔からしたたり落ちる……。うそのように雨が降りやむ。

この草刈り作業場には食べものがある。美しく咲いた山百合の花、この花の根はラッキョウが重なり合ったように、火で焼いて食べると最高だ。またスズランの赤い実や日本では絶対に捨てる真つ赤なキノコ、もちろん蛇やカエルなどは血眼になって探し、必ず火で焼いてむさぼり食う、生のままは絶対に食べない。生きるために得た貴重な体験である。

作業ノルマも終わり收容所へ帰っても、着替えるものとして何もない。被服は手で絞れるだけ絞り、またそれを着用して、夕食の汁をすすり民主主義の講和を聞き、やっと与えられた部屋の止り木に横になる。ハックション、ハックション、くしゃみの音が続く。絞った被服は自分の体温で乾かずより方法がない。風邪でも引いたら大変だと心配するが、日本へ帰るまではと気が張っていたのだろう。今日まで生命があった。作業の疲れでいつしか眠る。ジャランゴーン、ジャランゴーン、地獄

の鐘に夢を破られる。もう起床の時間だ。体を動かすたびごとに被服がガバガバ音がする。体温ですっかり乾いていた。

また昨日と同じ作業ノルマが続く。何回目かの入浴時に、お尻の肉をソ連の女医に引つ張られ「ニハラシヨ、オカ」病弱者だ。栄養失調の宣告を受けて、作業中止をさせられて、数日後栄養失調者だけが收容所の移動命令があり、行き先のわからない次の收容所へ。戦友たちと再会を約束して果てしない行軍が続く。また幾人かの戦友が、いや私を含めて行軍途中に死亡していくのだろうか。だれが言うともなく死の行軍と語りつがれ、倒れちゃいけない帰るその日まで……。

たどりついた收容所は病弱者だけ。主として收容所内の清掃であったが、鉄道建設作業隊という恐ろしい名前だ。夜の作業が多い。このころ私は栄養失調で夜盲症、鳥目になる。日中の明るいうちはなんともないが、日暮れになると視界がボーンと霞んで見える。眼の前に丸い輪ができてその輪の中だけしか見ることができない。重症になると丸い輪も小さくなり視界も定まらず、歩くこ

とが困難になる。昼は収容所内の草取りや清掃で、時々夜の作業に狩り出される。

鉄道建設作業隊の名前であるから付近に鉄道でもあるのだろう。時々列車の気笛が聞こえる。夜の作業時間は定まらず、貨車の来るたびに起こされる。貨車の積み荷は小砂利である。今夜もまた貨車が来た。人員点呼を受けて角スコップを受け取り、黙々と作業現場まで歩く。

月の光に照らされて鉄道のレールが光る。その光を見ながら歩く。枕木につまづき転びながら夜盲症なるがゆえに、ただひたすら鉄道のレールの光をたよりに……。

貨車から小砂利をおろす。枕木が敷設できるように整理する。作業が進行するとだんだん作業現場が遠くなる。このごろでは毎日のように夜間作業があり大変つらい。強制労働でますます栄養失調がひどくなったのか、体もカサカサ、どこの肉を自分で引っ張ってみてもよく伸びる。日本への帰国もあきらめなければならぬのか。焦った、本当に焦った。

この収容所へ移動させられて気づいたことは、収容人員が五百人であった。今までの収容所は、どの収容所で

も千人単位の生活だったのに、このごろ移動する収容所の人員は五百人。移動行軍途中また栄養失調などで死亡者が続出したためではなからうか。と私なりに考えた。こんなところで死んでシベリアの土になってたまるか。気をゆるめてはいけない。石にかじりついても祖国日本へ帰るのだと、思う心は抑留者全員が同じ気持ちであったらう。

私も栄養失調が重体となり、抑留生活二年六か月後に病弱者と烙印され、病弱者だけの収容所へ移動させられた。ソ連兵は私たち病弱者を「オカ」と呼ぶ。作業は炊事用の川からの水汲み運搬作業。そのほかにシベリアでの抑留生活を総括する「穴堀り作業」。どうしてもシベリア抑留体験記に書き残しておかなければならない穴堀り作業である。

突然のシベリア抑留と連日の強制労働のため、それに加わる栄養失調で、日本帰国を夢に抱きながら入退院を繰り返しつつ、異国の地に倒れ散った戦友のしかばねは、被服を全部はぎ取り、下履きだけにして旧牛馬小屋の死体置場にしまう。しかばねが五体か六体になると、

カチカチに凍った戦友の死体に、白カバの適当な枝で腹側に二本、背中側に二本針金でしぼる。その上に見えないように荒むしろを巻つけて、天秤棒で私たち「オカ」病弱者が二人して担ぎ、掘った穴に投げ入れて、そのあとは土を落し入れ、その土をならして死体埋葬作業が終わる。この準備が穴掘り作業である。だから遺品や遺髪どころではない。シベリア抑留中に死亡した戦友ほど本当に哀れを誘う。またそんな感傷に長くひたっておれない、明日は我が身なのだ。ここに収容されている全員が栄養失調の病弱者だ。明日は俺の番か、今度は俺の番だ、と話し合いながら穴を掘り続ける……。

昭和二十二年九月上旬ごろ、この収容所日本人抑留者の病弱者全員が、日本へ「ダモイ」帰国のうわさが広がった。同月中旬ごろ収容所広場に集合整列させられた。ナチャニック、収容所長より、「国際赤十字社の条約により、お前たち病弱者を日本へ帰国させることになったので、いつでも出発できるように用意しておけ」と通訳されたが、うれしいはずなのに、実感がわいてこない。二か年間異国の地シベリアで強制抑留生活中、日本へダ

モイ、日本へダモイ、と何回となくだまされ続けられ、収容所を強制移動をさせられ、そう簡単に信じて喜ぶことはできない、その日が来るまで。

九月下旬病弱者集合させられ出発命令が伝えられた。直ちに嚴重な身体検査が実施されて私物のほとんどが取り上げられた。残ったものは食事用のブリキの空き缶二個、手づくりの木のスプーンとはしだけを腰のバンドにぶら下げる。「お前たちは、これより当収容所を出発して、汽車に乗るため鉄道のあるところまで行軍する。」通訳を通じて収容所長の声がシベリアおろしと一緒に汁腹に響く。あとに残る健康者と言葉をかわすこともできず、ソ連兵に監視されながら、あたふたと収容所をあとにする。

約五キロくらい行軍したかなと思うとき、鉄道線路が見えた。二十分くらい待つと汽車が来た。機関車の後ろに有がい車、その後ろは全部無がい車で、どこの収容所から乗車してきたのか、日本人抑留者であった。ソ連兵の監視が嚴重で、言葉をかわすこともできぬまま、ソ連兵の指示された無がい車に乗せられた。有がい車に黒バ

ンが積み込まれた。この有がい車が炊事車だった。私たち抑留者の気持ちも知らぬげに、大きな気笛と煙を残しながらどこへ行くのか発車した。点々とある収容所が見る見る小さく遠ざかっていく。

乗車して一昼夜過ぎた朝、前方にキラキラ眼にまぶしく光る。海だっ、海だっ、小高い丘の上にテントが幾つも並んで見える。五年ぶりに見る海、この海に向こうに祖国日本があるのだろうか。キョロキョロしているうちに丘の下に汽車がとまる。全員下車させられた。強制抑留生活で、それぞれいろいろな思いでソロソロ汽車からおり、ソ連兵の指示どおり整列する。私たちを運んだ汽車は何ごとも知らぬげに、気笛も鳴らさず走り去っていった。

丘のテントまで歩き、広場で整列して待つうちに、このテント収容所の責任者が、やはりソ連人であった。「ここがナホトカである。下の海岸にもテントがあるが、日本から船が来るまで、ここで生活して、民主々義を学び、各自健康に十分注意せよ。」と通訳された。夢にまで見た日本、生きて日本へ帰ることができたのか。ポーっとし

て何を喜んでいいのか、ただポーっとしているばかり、これが実感だった。それぞれ名前を呼ばれ、人員点検後各テントに割り当てられた。せっかく一緒に乗車した人たちともまた別れ別れにさせられた。

このテント収容所はソ連軍の兵隊が配置されているが、今までの収容所と違って、針金の三重の柵も地獄の鐘もない。衛兵所や強制労働もない。食事も黒パンから白パンに変わり、スープもドローンとした油の多いスープに変わった。作業もなく毎日タタゴゴロしている。だんだん落ち着きを取り戻すと、戦友たちとも話す言葉も多くなり、私たちより先に収容された連中に聞くと、日本へ帰る抑留者は、必ずこのナホトカ港から帰国するため、ここが集結地だそうだと。

二週間くらいで無事に海辺のテント収容所へ移動させられホッとした。民主々義講話と民主運動の勉強会が毎日続き、一週間に一回収容所の広場に集合させられて、反動分子の摘発だといって、旧軍人将校クラスの名前から旧日本軍人の兵隊であった民主隊員から大きな声で一人か三人呼び上げられて、広場中央で丸太でつくられた舞

台に立たされ、抑留者たちから、「反動分子だあ」「反動分子だあ」と兵隊抑留者に突き上げられ、強制労働作業隊へと引き戻される。同じ日本人同士で気の毒であるが、これがソ連のやりかたであろう。この集会は行事に成績の悪い者は、あの苦しい作業隊収容所へ逆戻りさせられるので、みんな一生懸命に祖国日本に帰るためにも、民主主義運動に参加せざるを得なかった。

とうとう待ちに待った日本帰国命令が伝達され全員広場に集合、長い間生死をともした空き缶、手づくりのはし、スプーン、さようなら、ごみ捨て場へ投げ込む。乗船するために収容所を後にするが、だれも振り返る者もない。ただ前へ前へと足を運ぶ。まだ船が見えない。そんなことを考える必要もない。ソ連兵の指示どおりみんなと一緒に行動しなければ、先のことはだれもわからない。ここで残されたら大変だ。

約二十分くらい行軍させられた坂道、長い長い坂道だった。長い長い坂道を登り詰めたとき、「船だぞう」「船だぞう」見たっ船を。全員が「ワァッ」と言っていて、登り詰めた坂道の反対側を転がるように、我れ先に駆け

下りた。ここでおくれたなら日本へ帰れないのだと思った。前と後ろの方でソ連兵が大きな声で叫んだような気がした。

あまりにも苦しい長いシベリア抑留生活だった。岸壁に整列し少し気も落ちつき、船を見上げると、船尾に米国の旗が寒風にはためいていた。「あれっ」日の丸でなく、意外な気持ちだった。ソ連軍の人事係の責任者であろう、胸に勲章をキラキラさせ、手に部厚い帳簿を開いて、一人一人片言の日本語で抑留者の名前を読み上げる。「ハイッ」大きな声で返事をする、ソ連兵が「ハラショ、グバイ」と言われて、船のタラップを一目散に駆け上がる。片言の日本語であるから、発音がはっきりしないが、自分の名前に合っていると思ったら、ハイッと返事をする。もたもたしていると再調査確認のために、あと回しにされる。人数が合えばよい、私も「ハイッ」と返事をして、後も振り向かず、全身の力を出し切って、タラップを駆け上る。船内の入り口に、白衣の天使が一列に並んで、はっきりした日本語で、「兵隊さん、長い間本当にご苦労さまでした。」ジーンと胸が締めつけられ

て、涙が出てきてしようがなかったが、看護婦に答えるすべもなく、早々に船内にもぐり込む。まただれ一人として甲板に出る者はいない。いつおろされるかと恐怖心ばかり。乗船のときなんとなくナホトカの石を一箇ポケットに忍ばせ、現在もときどき取り出しては、抑留当時の苦しかった収容所生活を寒々と思いつす。

乗船してから約二時間ぐらいだろうか、グワラ、グワラと錨を上げる音、スクリュウの回転する音が響く。出港合図の「ドラ」も鳴らず、船が動き出したことは間違いない。体が少しずつ揺れる。もうソ連兵も動き出した船を戻すことはできないだろう……。そのうち船内放送があり、はっきりとした日本語で「兵隊さん、本当にご苦労さまでした。この船は日本の舞鶴港へ向かって出発いたしました。これから皆さんにお菓子を配給いたしましたので、召し上がって下さい。なお皆さんは病弱者ということです。気分が悪くなった方は申し出下さい。」

二、三回放送されているうちに、白衣を着た看護婦が、森永ミルクキャラメルの小箱を一個宛ずつ配給された。子供のころは五銭だったと思う。そのキャラメルの小箱

を手でぐっと握り締めて、今度こそは本当に日本へ生きて帰ることができるのだ。キャラメルの小箱を見つめながら、涙ばかりがとめどなく流れ出す。

ナホトカからやっと着いた舞鶴港、ボート、ボートと汽笛が鳴り渡る。もう大丈夫だ、あっちこちから船室より甲板上へ飛び出して来る。この目で日本の風土を確かめたい。港は霧雨だった。復員者全員が防疫のために船は沖合に停泊する。

翌日も霧雨が降っていた。港からはしげが迎えにくる。日本海の波は静かにないでいた。順々に船のタラップをおりて、はしげに乗り移る。黙々とだれも声を出す者もない。港の岸壁が近づくが、涙でぼんやり霞む。岸壁は人、人、人でいっぱいだ。日の丸の旗を振っている人、まだ帰らぬ人の名前を書いたのぼりを持った人、「兵隊さん、お帰りなさい。本当にご苦労さまでした。」

白いかっぱ着の婦人会の皆さんたち、夢に見た祖国日本の大地へ第一步をしっかりと踏み締めて、生存者となった日は、昭和二十二年十月二十六日であった。ああ感無量、異国の地シベリアで散った戦友よ、安らかに

眠って下さい。舞鶴の仮宿舎で、一人々々が別々に呼び出されて、初めて見る米国人の前に立たされ、抑留中の収容所生活の状況等をいろいろと聞かれた。その後入浴するので案内された何十畳もある畳敷きの部屋、何十人も入浴できる浴場、体を全部湯舟に入れることができる。タオル、石けんも使用できる。上り湯もボタンを押すとジャアーと限りなく出る。大きな鏡がある。鏡の前で栄養失調の姿を見ると、骨と皮ばかりで、どここの体の肉をつまんで見ても、つまみ安くよく伸びる。

入浴後被服を受領する。軍服、下着は夏物上下二組、軍靴一足、毛布、軍手軍足、十四、五点支給された。さらに復員証明書が発行されて、舞鶴からおのおのふるさとの駅までの交通費無料の証明書である。そのほか手の切れるような百円札が五枚、五百円という大金、いやぁー驚いた。どうしたらよいのか、まごついた。帰ったなら自分の部屋を三百円くらいでつくり、残りは両親にやったなら驚くだろうなあ、そんなことを考えたら笑いが出てきた。

手続きなど全部終わりに割り当てられた部屋に落ち着くと、

場内放送で、「皆さんは、シベリア抑留中の食事には大変ご苦労されたことですので、急にお米ですと、胃腸を痛めますので、五分がゆを差し上げますので、徐々に胃腸をならして下さい。」

舞鶴で七日間滞在して、東舞鶴駅より復員特別列車に乗車、婦人会の皆さんに見送られて、一路故郷へ故郷へ……。見るもの、聞くもの珍しく、五百円の大金も、青々とした果物やあんパンと、食べ物にすっかり使い果たしてしまったとき、列車は京都駅にすべり込んだ。駅ホームには京都婦人会の皆さんが、「兵隊さん、ご苦労さまでした。」湯茶の接待を受けた。京都駅を発車してからは、舞鶴で支給された物品を売りながら、柏崎駅に到着する。すっかり世の中が変わってしまった。柏崎駅で下車して湯茶の接待を受け、短期間であったが、戦友と別れ越後線に乗り替える。あまりにみすばらしい姿なので、夜に到着する列車を利用して、復員証明書を駅員に見せて乗車、十一月四日午後七時ごろ西吉田駅到着下車する。

歩いて生家へ着き、案内を乞うと、見なれない女の人

が出てきた。「俺だあ、シベリアから今帰ってきたよ」
「お婆さん、おじさんが帰ってきたよ」、奥へ向かって大きな声で叫んだ。バタバタと足音と同時に「おー、おー」声にならない声を出しながら、お袋が走り出して来た。そのお袋も八十五歳で他界した。見なれぬ女の人は、兄嫁だった。家の中の床の間を見ると、自分の写真が飾られ、ご飯と灯明がともされてあった。

あれが夢であればいいが、そんな生やさしいものではない。思い出すと胸がつまる。戦争は悲惨で恐ろしいの一語に尽きる。

異国の地シベリアで栄養失調や強制労働で死亡した、戦友の冥福を心から祈る。

入ソ当時の思い出

栃木県 菅 房 雄

八月二十三日集合命令。いよいよソ連兵が来て武装解除。彼ら来る早々長靴をぬがせドタ靴と交換。酒をラッ

パ飲み。昼近く馬車に食糧積載出発、流浪の始まり。その夜から雨。満州の道路は日本の水田を歩くと思えば間違いない。不眠不休悪路の行軍、弱い馬は落伍してゆく。隊列を離れたら最後ハイエナのごとくついて来る現地民に掠奪暴行は必至。降る雨、泥んこの中帝国軍人のなれの果てが行く。翌日の夜阿城着。馬の手綱を両腕に抱いていつの間にか眠ってしまう。フト目を開けると、手綱が腕から離れている。馬もコクリコクリとやっているの、逃げられる心配はない。

次の日は雨が上がった阿城の街中、みな晴天白日旗に赤旗、打倒東洋魂の張り紙。歴史的にも支配者が移り変わっていたとはいえ、その変わりの身の早いのに驚く。貨車に乗せられ牡丹江方面に向け出発、途中幾度かとまる。ソ連軍貨車に乗ってきたが、そのときはまだ将校は軍刀所持していたので大過なし。何事か起きては大変と、若い見習士官をなだめるのが一仕事であった。その中トンネルの真ん中でとまる。なかなか動く気配なし。いよいよ爆破だと車外に出たが、真っ暗。馬やら人の死骸いっぱい。どうせやられるなり車の中がましだと。そ